

# 市川市雷下遺跡出土の棒状木製品について

蜂屋孝之

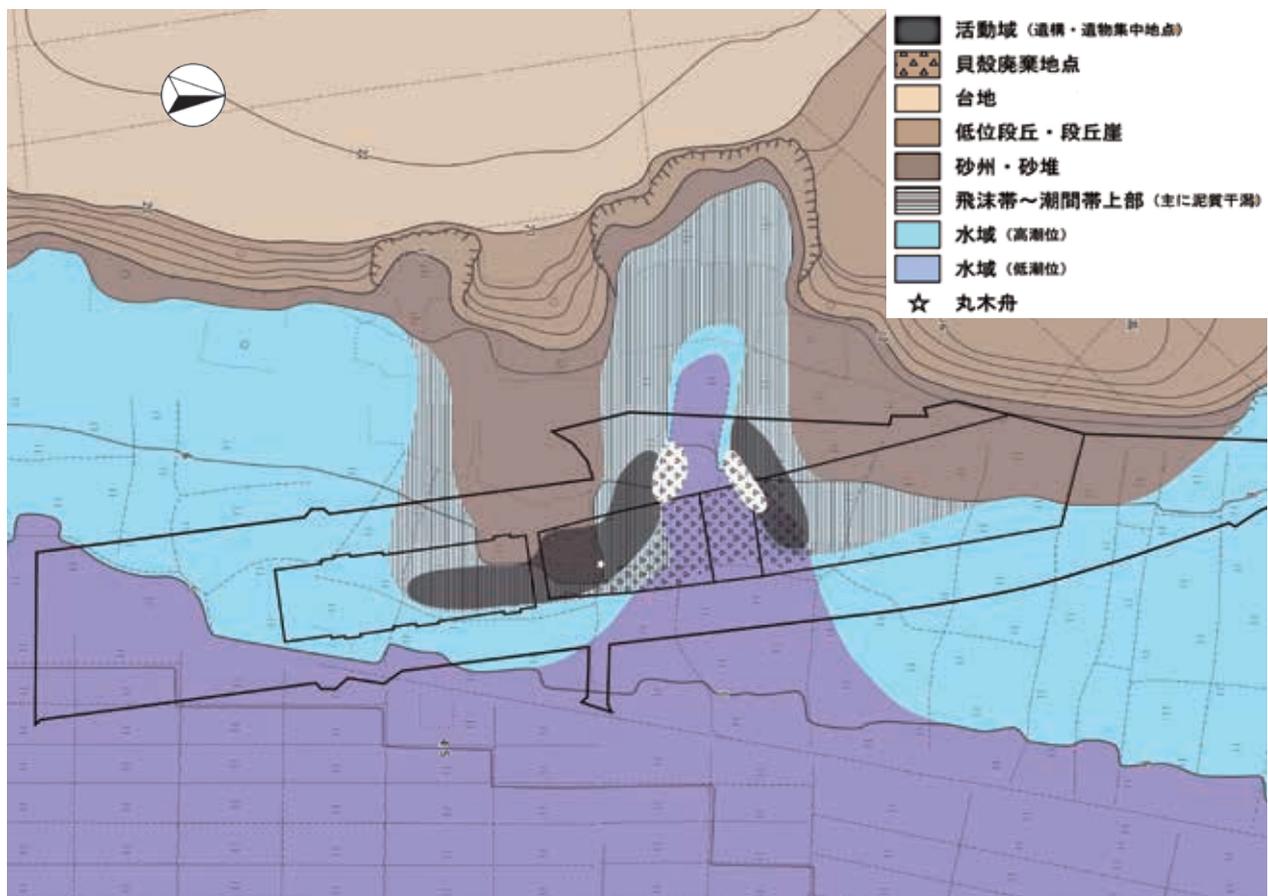
## はじめに

千葉県市川市に所在する雷下遺跡は、縄文時代早期後葉の低地遺跡である。貝塚を伴い多くの遺構・遺物が出土している(服部ほか 2017・2019)。出土遺物の中には低地遺跡特有の木製品があり、この中にこれまでに類例を見ない棒状木製品が含まれていた。ここでは、その木製品の形態や出土状況、雷下遺跡に住んだ人々の環境などを検証し、その用途について検討してみたい。

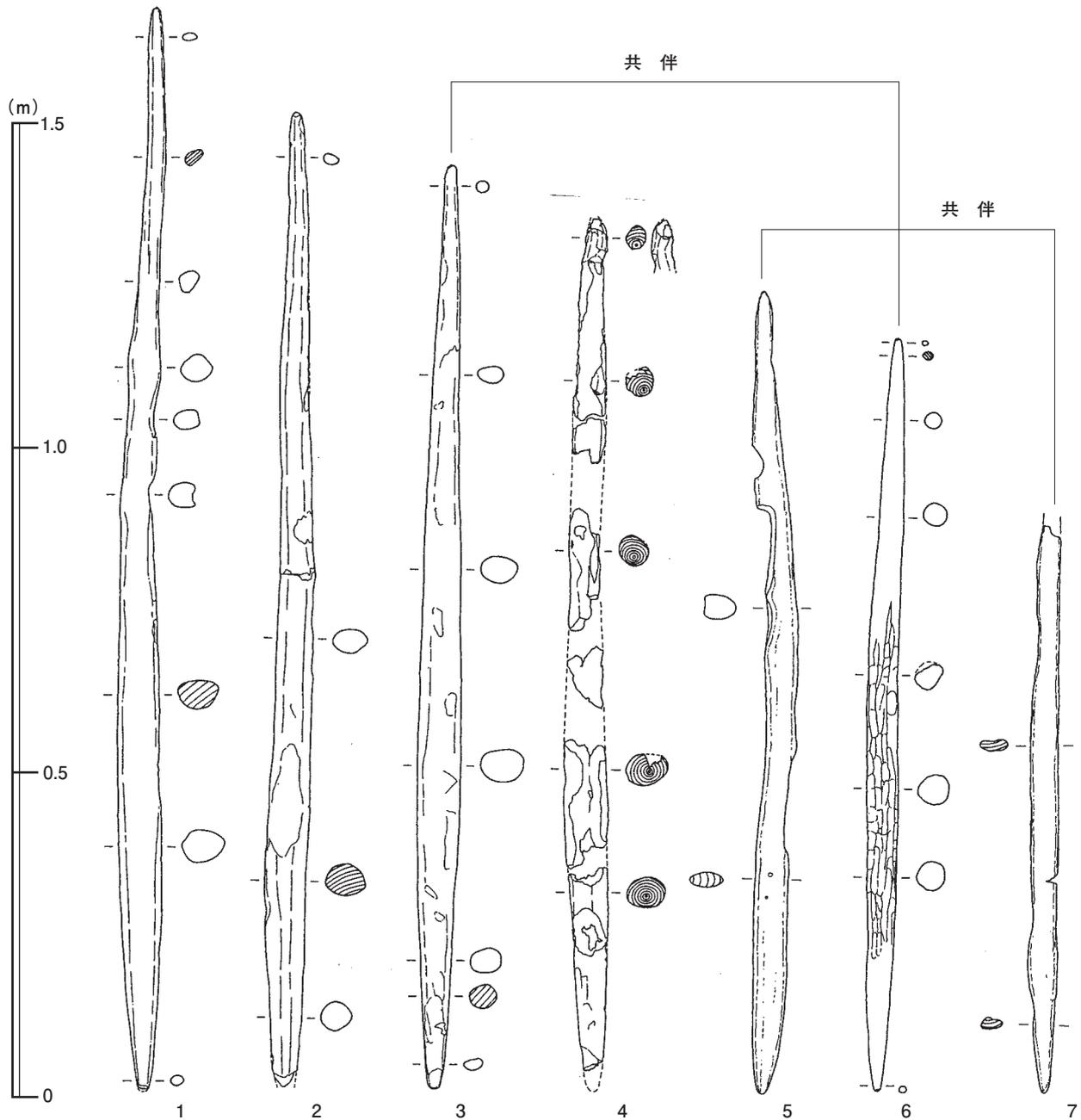
## 1. 雷下遺跡の概要

雷下遺跡は、市川市を流れる国分川右岸の縄文時代早期後葉の貝層と自然貝層を伴う低地の遺跡である。服部智至が調査成果をもとに復元した遺跡の様子を第1図に示した(服部 2019)。有楽町海進期に形成され

た波食台上に立地し、波食台を浸食する小規模な埋没谷を埋積しながら貝層が形成されていた。貝層は、第9貝層～第1貝層の9層からなり、海成層がもっとも厚く堆積する埋没谷内部では、標高約2m～2.5mの位置に間層を夾在しながら約4.5mの厚さに達していた。貝層を含む堆積層の時期は、茅山上層式を主体とする早期末葉までの期間であり、房総半島においては、集落などの様相がほとんど不明な時期の遺跡である点で貴重である。年代測定では、約1,000年間に連続と形成された堆積層であることが判明している。珪藻や微小貝類などの分析から、海進期における貝層の堆積環境は、下位から上位へ向けて海水泥質干潟の環境が続き、局所的には貝殻廃棄の場が、潮間帯上部～飛沫帯にあったようである。第1図中央の黒い範囲が、遺構・遺物の集中した範囲で、生活の痕跡を色濃く残



第1図 雷下遺跡の環境復元図



第2図 雷下遺跡出土の棒状木製品 (S=1/10)

表1 棒状木製品一覧表

遺跡名	挿図 No.	最大長 cm	最大幅 cm	遺存状態	樹種	出土層位	報告書 挿図No.	備考
雷下遺跡	第2図1	165.2	6.5	完形	コナラ属クヌギ節	第4貝層	第246図8	
	第2図2	149.6	6.2	先端一部欠損	コナラ属クヌギ節	第1貝層と第2貝層の間層	第246図9	
	第2図3	142.1	6.6	完形	コナラ属コナラ節	砂礫層2	第246図7	
	第2図4	131.0	6.3	欠損	コナラ属コナラ節	砂礫層2	第246図10	
	第2図5	124.0	5.0	一部欠損	コナラ属クヌギ節	砂礫層2	第245図4	保存処理により萎縮あり
	第2図6	115.9	4.8	完形	コナラ属クヌギ節	砂礫層2	第246図6	
	第2図7	87.0	5.0	一部欠損	-	砂礫層2	第245図5	保存処理により萎縮あり
道免き谷津遺跡 第1地点(4)	-	56.6	5.8	欠損	コナラ属コナラ節	砂礫層2	第246図18	
	第3図8	175.7	8.0	ほぼ完形	ナラ類	Ⅲa層(木本質泥炭)	第111図33	
	第3図9	151.8	7.6	完形	-	Ⅲa層(木本質泥炭)	第111図32	

していた。この範囲から敲石類を主体する石器群が出土しているほか、最古級の丸木舟や木製品、編組製品、骨角歯貝製品や動植物遺体などの貴重な資料が出土している。貝層の多くは、推定された堆積環境に調和するように沿岸流による二次堆積の様相を呈していたが、北西端の微高地においては、プライマリーな状態、すなわち当時の人々が廃棄した状態がよく保存されていると推測された。しかも周辺からは灰・炭化物集中地点(焚き火跡)や集石遺構が密集し、土器による煮炊きなどが行われていたことも確認された。また、第5貝層からは、解剖学的位置を保持した周産期人骨や幼児下肢骨が検出されており、浜での埋葬が行われたことを示していた。浜では貝採取のほか、丸木舟による漁労活動が行われた生業の様子が明らかになったほか、浜での煮炊きの痕跡となる集石遺構、埋葬の痕跡などから、一時的なキャンプサイトにとどまらず、一定期間、定住的な生活が潮間帯を臨むエリアで行われたと考えられる。第1図は、現在の地形図を基にしていることから、前期黒浜式期以降の海退後の海食崖の姿を反映している。早期の人々が暮らしていた海進期の当時はもっと海食崖が迫っていたと考えられ、当時の浜は第1図で示したよりも狭かったと推測される。

## 2. 出土した棒状木製品

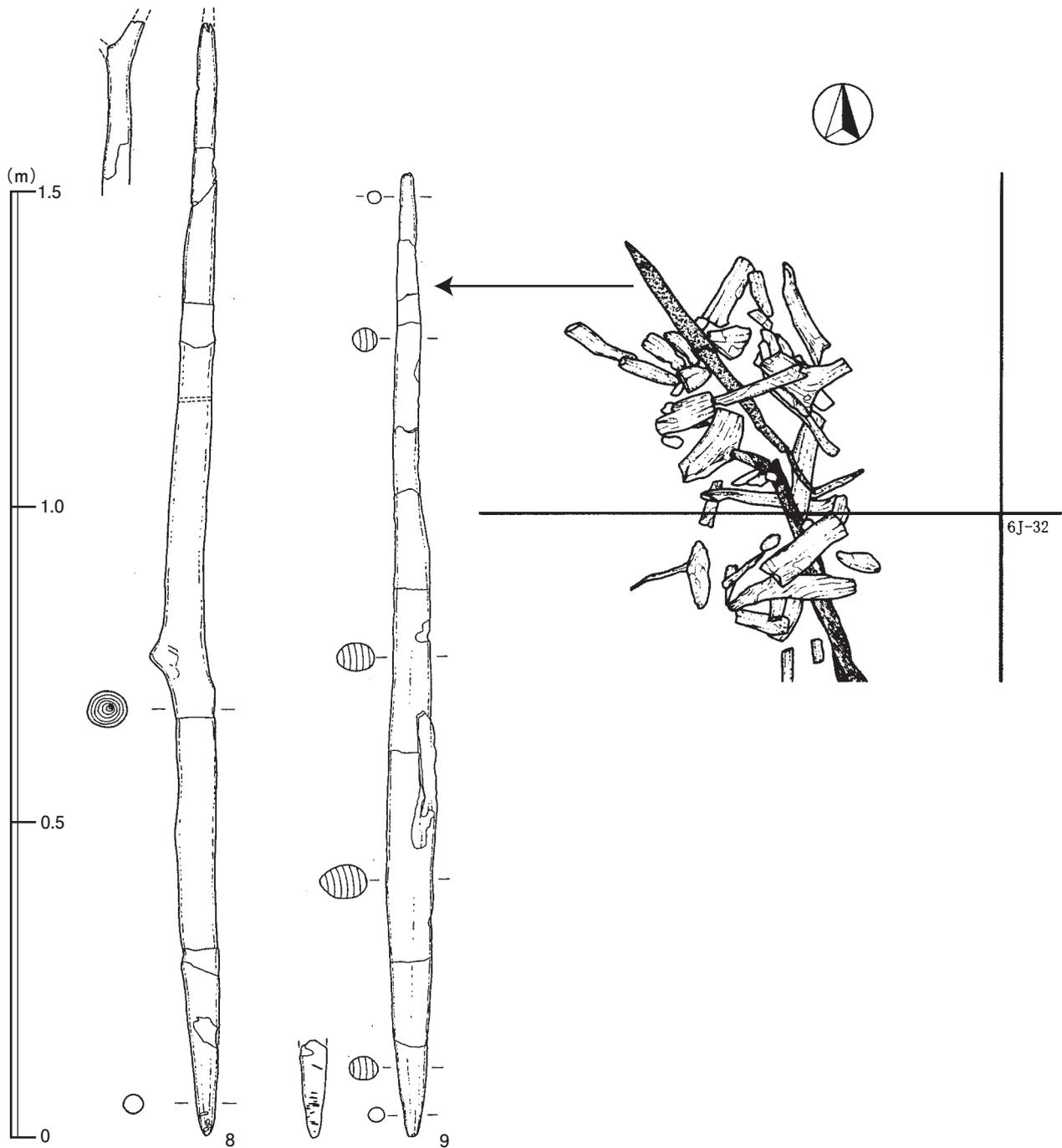
第2図に示したのが、出土した木製品である。その形態などから同種と判断できるのは、破片を含めると8点ある。図示したのはそのうちの7点である。出土した層位は基本層序のIV層からで、詳しく見ると1点を除き丸木舟の層準とほぼ同じIV③層とされる第5・第4貝層を含む層位からの出土である。丸木舟が使用されていた時期にこの木製品も使われていたと考えられる。出土状況は、垂直方向に各層準を貫くような出土状況ではなく、すべて横倒しになった状態で出土している。

表1に棒状木製品の大きさなどをまとめてみた。完形品に近いと思われるのは6点、第2図2はほぼ完形だが先端の一部が欠損らしく、4は部分的に欠損がある。7は欠損しており全長は不明であるが、1m以上はあったと推測される。最も大きな1は最大長が165.2cmもあり、最も小さい6でも115.9cmある。最大厚は1の6.5cmで、概ね5cm～6cm程度の厚さに収まっている。特徴的なのは、最大径の部分が中央部分ではなく片側4分の1程度の所にある点だ。最大厚部分から両端にかけてやや丸みを帯びながら次第に細くなっ

ていく特異な形状である。最大厚に近い片方の先端は尖って見えるが、反対側は緩やかに細くなり、握りやすい太さの部分が多く、末端は鋭く尖っているわけではない。断面形にも特徴があり、両端は真円に近いものの、最大径のあたりは楕円形に近い形状を呈している。1・2・3の実測図に示された断面形はよくその形状を現している。詳細に観察すると、1や6の最大厚に近い方では先端から約10cmの部分までが、やや急角度で径を狭めており、何らかの穴に差し込んで回転させたかのような痕跡を残している(写真5)。用途を考えるうえでは重要な点かもしれない。これらの木製品の製作方法は、直径20cm～30cm程度の丸太材を分割し、両端を削り込んで尖らせた丁寧な作りである。4は適度な径の枝をそのまま加工している。木肌が滑らかなものもあり、製作も丁寧であったことに加え、長い間の使用によることも考えられる。使用木材は、3・4がコナラ属コナラ節、その他がコナラ属クヌギ節と同定されている。コナラ・クヌギはともに広義にドングリの実をつける落葉高木である。

注目されるのは、写真1・2に示したように2本が隣り合わせ並行して出土している例が、2地点で確認されていることである。3と6、5と7が隣り合わせて出土している。5と7は第4図に示したように丸木舟を舫っていた可能性のある自然木の下から出土しており、自然木の下に差し込まれていたようにも見受けられる。これら以外にも並んで出土している木製品の出土例が写真3・4で、非常に興味深い出土状況を示している。浜で埋没していく過程では波浪の影響を考えないわけにはいかないことから、散乱せずに隣り合わせて埋没するには、紐などで括られていたことを想定したほうがよいのかもしれない。棒状木製品が埋められていたような土坑などの痕跡は確認されていない。木製品の出土地点周辺には、多くの灰・炭化物集中地点(焚き火跡)などの遺構群も検出されており、これらの遺構群は潮間帯を間近に見る飛沫帯から陸域の微妙な区域に集中しており、棒状木製品も同様の環境において埋没したものであり、浜で使用されていた道具の一つであったと考えられる。

これらの棒状木製品の類例が雷下遺跡の上流、堀之内貝塚の眼下に広がる低地遺跡である道免き谷津遺跡から2点出土していた(蜂屋 2013)。第3図にその2点を示した。8は一部がやや異なる形態であるが、9は雷下遺跡例とほぼ同形態である。8は、真直ぐな太い枝材をそのまま使用したものと考えられる。最大長

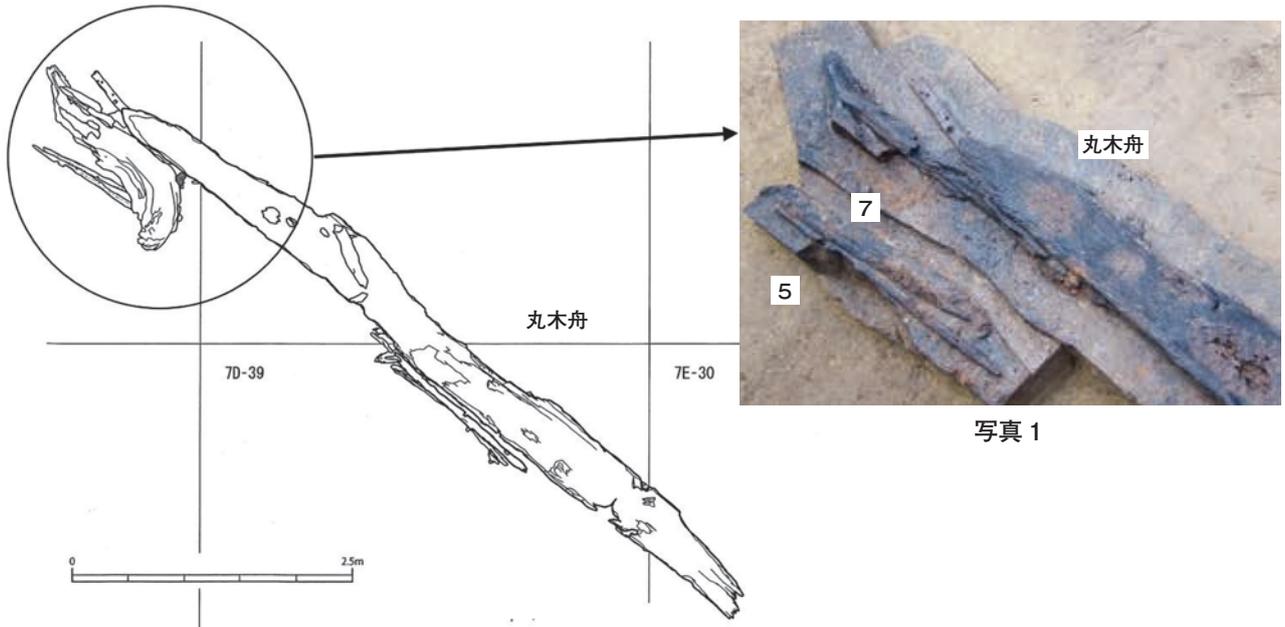


第3図 道免き谷津遺跡出土の棒状木製品 (S=1/10) と出土状況

は175.7cmである。最大径が8.0cmで同じ径の部分が  
多いが次第に径が小さくなり、末端は枝の二股を残して  
いる。中央には切り落とした細枝の痕跡を残している。  
樹皮を剥いただけでなく、先端部は丁寧な加工が施さ  
れている。9は最大長151.8cm、最大径7.6cmで、雷下  
遺跡の諸例と同様に直径20cm～30cm程度の丸太材を分  
割し、両端を削り込んで尖らせた丁寧な作りで、径も  
全長の約4分の1あたりが最も大きい。木材は、9が  
ナラ類、8は未同定である。9の先端部には6で見ら  
れたよりも明瞭な尖った形態が観察され、使用痕と考

えられる。この2点の時期であるが、出土層位は木本  
質泥炭のⅢ a層とされた層である。Ⅲ a層は後期初頭  
～晩期末までの堆積層で、これらの木製品が出土した  
道免き谷津遺跡第1地点(4)の調査地点では、加曾利  
B2式～B3式の土器が主体であった。第3図には9の  
出土状況も示した。自然木の集積した中に混在してい  
たこと、概ね後期土器を主体としている層位からの出  
土であることから、8・9の時期は縄文時代後期と考  
えられ、雷下遺跡例とはかなりの時期差を伴っている。

以上、出土例についてみてきた。雷下遺跡の棒状木



第4図 棒状製品5・7の出土状況



写真2 棒状木製品3・6出土状況



写真3 その他の木製品出土状況



写真4 その他の木製品出土状況



写真5 棒状木製品6の先端部



写真6 棒状木製品9の先端部

製品は、その出土状況から浜での作業ないしは海域での漁において使用された道具の可能性が高く、2本がセットで出土しているものがあることを考えれば、組み合わせて使用されていた可能性があるのかもしれない。道免き谷津遺跡例から、この木製品が縄文時代後期までこの地域で使われていたのであろうと考えられ、後期でも国分谷の下流域に広がる海域までは、あまり遠くないことから、河口や海域での漁などで使用された可能性を否定するものではないと思われる。

### 3. 木材の調達とその自然環境

百原 新らによれば、雷下遺跡周辺の古植生の分析によって以下のような復元ができるという(百原ほか 2019)。東京湾に開いた国分谷河口部に位置している雷下遺跡では、高木性樹種の組成は、タブノキの葉が砂礫層2から砂礫層1まで連続的に、しかも他の樹種よりも圧倒的に多く検出されたことから、周辺の下総台地の斜面にはタブノキ優占林がひろがっていたと考えられるという。また、タブノキは海沿いの常緑広葉樹林の優占種で、潮風に強いために外洋に面した山地斜面でしばしば優占する。一方、種実遺体で大多数を占める先駆性の落葉広葉樹種は、遺跡とその周囲の人為の影響の大きい植生を示している可能性が高く、エノキ、ムクノキ、ケヤキ、キハダ、コナラ属コナラ亜属が遺跡周辺の二次林の構成種だったと考えられるという。貯蔵穴からナラガシワの堅果遺体がまとまって産出し、クリの堅果片がわずかでも出土していることは、コナラ属コナラ亜属やクリの個体が遺跡の周囲に比較的多かったことを示しており、海に面した台地斜面の林には潮風に強いタブノキが優占し、コナラ属やクリは台地上に優占していたと考えられるという。また、入り江に面していた雷下遺跡の貝層の堆積環境を指標する沈水植物に、潮間帯から汽水域にかけて分布するコアマモと、汽水域に分布するカワツルモ、イトクズモがある。ヒルムシロ属などの淡水生の水生植物が含まれていないことやカヤツリグサ科の抽水植物や湿性植物が少なく、塩性湿地を特徴づけるオオクグが産出することから台地斜面まで干潟と内湾の汽水・海水域が広がっていた可能性が高く、草本遺体に林床性の種類が少ないことは、二次林の林内が比較的明るかったことを示唆するという。このことから、浜で生活していた人々は、後背の台地上に優占するコナラ属の林から棒状木製品の材料となるコナラ属などの木材を調達していたと考えられる。

ちなみに、能城修一らによれば、樹種と器種との対応を見ると、ムクノキは丸木舟と、こて、へらに多用されて器種が限られるのに対し、コナラ節は、横槌から石斧柄、敲打具、へら、曲がり柄、棒状木製品と様々な器種に使われており、最も汎用性の高い素材であるという。クヌギ節は櫂などに、ムクロジはへらと小割棒状品に、ツバキ属は櫂と部材に選択されているという(能城ほか 2019)。

### 4. その他の出土遺物

貝層や間層中および貝層分布縁辺の遺物包含層からは、縄文時代早期後葉の茅山上層式土器を主体とする条痕文系土器群が多量に出土しており、煮炊きに使った土器類を食料とした貝などととも浜辺に廃棄していたと考えられる。また、石器類は石鏃、石鏃未成品、磨製石斧、打製石斧、敲石類、石皿などが土器類とともに出土しており、敲石類が全体の約70%、打製石斧が20%を下回る程度であることから、生産用具に比べ加工の割合が高いことが明らかとなっている。骨角歯を素材とする製品も出土しているが量的には少ない。このうち、一端あるいは両端を尖らせた骨角器が6点出土しており、漁に用いられた刺突具とみられる。以上のような出土遺物をみると、前期以降の台地上の貝塚を伴う集落などと変わらない生活道具類が使われており、ある程度の期間、定住的な生活がこの浜で営まれていたことを出土した遺物群が示していると考えられる。

### 5. 木製品が埋没していた地点の環境

能城修一らの珪藻分析の結果では、丸木舟が出土した地点の環境は、圧倒的に海水種が多く、海水泥質干潟の環境が推定され、丸木舟の層準の直上では、珪藻化石が非常に少なく陸域であったと推測されている(能城ほか 2019)。また、堆積層中から出土した微小貝を分析した黒住耐二によれば、食用後に廃棄された貝殻によって貝層が形成された場所は、堆積層の下部層では潮間帯上部、第6貝層から上位では飛沫帯のアシ原的な環境であったと推測している(黒住 2019)。このことから、第5・第4貝層を含むⅣ(3)層の堆積環境は、日常の土器を使用した煮炊きや作業場所であった時期が長くあり、丸木舟もこのようなエリア近くで係留あるいは陸揚げされたまま埋没していった可能性が高い。ただ、陸域の環境が長く続いたわけではなく、丸木舟本体に認められたアナジャコ科やスナモグリ科

などの生物の巣穴の痕跡から(蜂屋 2019)、丸木舟の埋没後一時的には中・低潮線の潮間帯となる時期も現れており、変化の激しい浜の環境の中で当時の人々が生活しており、棒状木製品は、そういった環境の中で使用された道具の可能性が高いことがわかる。

## 6. 雷下遺跡に生きた人たち

どのような人々が、この浜で生活し、棒状木製品を使用していたのだろう。遺跡から出土した人骨について澤田純明・佐伯史子が分析を行っている(澤田ほか 2019)。出土人骨は幼児1体の下肢骨群と、全身の骨がまとまって出土した周産期人骨1体を除き、ほとんどの骨が解剖学的位置を保たない散乱状態で見つかっている。周産期人骨1体についてはまとまりがあることから、埋葬によるものと推測される。人骨の出土層位は、早期後葉の堆積層から出土していることから、極めて類例の少ない縄文時代早期後葉の人骨である点で貴重である。

人骨分析によれば、散乱人骨66点と、幼児1体の下肢骨、および周産期人骨1体の全身骨から構成されており、最小個体数は周産期1体、幼児1体、成人9体、計11体であった。成人の死亡年齢は壮年ないし熟年であり、老年と思われる骨は見当たらなかった。成人四肢骨をまとめると、華奢な骨体が28点、頑丈な骨体が6点、中間的な骨体が7点となり、華奢な骨が多いように見受けられ華奢な人骨が多いが頑丈な個体も含まれており、四肢長骨の骨幹断面形態においても多様性が認められた。複数の個体にエナメル質減形成や骨膜炎が出現しており、生活環境が良好ではなかった様相がうかがえるという。

横断面の計測値が最も多く得られた大腿骨について、雷下遺跡出土成人、縄文早・前期の男女、および縄文中・後・晩期の男女の中央断面示数と骨体中央周比較すると、多くの雷下大腿骨の断面計測値が、縄文中・後・晩期人骨の平均値より小さく、一般に華奢とされる縄文早・前期人骨の平均値に近いという。これらの雷下大腿骨計測値の分布は、縄文早・前期人骨の女性・男性双方にまたがって広がっており、雷下遺跡の華奢な人骨群は男女両方で構成されるものと思われるとしている。他方、少ないながら頑丈な四肢骨が雷下人骨に混在しており、雷下四肢骨群には多彩な形態的差異が確認されている。四肢骨の形態の変化には、運動量や力学的負荷が強く関係するとされ、雷下四肢骨群の形態が非均質的であることは、例えば分業などの

システムが確立しており従事する作業が相違していたか、もしくは異なる環境の出自をもつ人々が雷下遺跡に混住していたことを示唆しているのかもしれないという。非常に興味深い所見が示されている。

人骨の安定同位体分析を行った米田 穰によれば、雷下遺跡の縄文時代早期人はより強く海産物に依存していた可能性が高いという。一部の人骨では、陸上生態系に特化した食生活を示しているものがあり、この個体については、陸上資源を多く利用する地域からの移入者である可能性があるとの所見を示している(米田 2019)。

縄文人の男女各10体の全身骨格から解剖学的方法を用いて身長を復元した佐伯史子によれば、縄文人の平均身長は男性が162.7cm、女性が149.3cmであるという(佐伯 2006)。また、岩本岩太郎・高橋譲によれば、早期の長野県湯倉洞穴から出土した早期とみられる女性人骨の推定身長は147.7cm、同県栃原人骨2例の平均身長は148.6cmであるという結果が示されている(岩本ほか 2001)。雷下遺跡の出土人骨の遺存が悪いため身長を推定することは難しいが、雷下遺跡に住んだ人々も佐伯などによる平均身長と同程度の身長であったとすれば、棒状木製品の第2図1の最長のものでは、男性であればほぼ身長と同じであること、女性であれば優に身長を超える道具であったことは明らかで、その大きさから主に男性が使用した道具の可能性が高いと思われる。

## 7. 雷下遺跡の食料資源

雷下遺跡では、当時の人々が食料とした貝類が廃棄され、貝塚を形成していた。貝類の分析を行った服部智至は、ハイガイ・ハマグリ・シオフキなどの成貝を中心に採取し食用としていること、その組成は、関東の縄文早・前期貝塚の貝種組成ときわめて近似していること、泥質潮間帯の堆積環境が推定される貝種の中に、生息域の異なる砂泥質干潟に生息するハマグリやシオフキが得られていることなどを明らかにしている。このことから、当時の人々が生活していた目の前の浜からハイガイなどを調達しただけでなく、そこから離れた他の浜へも貝の採集に出かけていたことを示している(服部 2019)。

主要な採集貝種であるハイガイの成長線分析を行った樋泉岳二によれば、ハイガイの採集時期は、春～夏?が中心であったと推定され、それ以降もある程度の採集が行われていた可能性が強いという。また、ハイガ

イ・ハマグリともに、2月を起点とした年周期の前半に採集活動が活発であること、ただし年周期の後半にも採集が行われていた可能性があり、少なくとも採集活動が特定季節に限定されるものではなかったという(樋泉 2019)。

小川慶一郎による雷下遺跡の貝層を中心に出土した動物遺体の分析では、陸生哺乳類9分類群が同定され、ニホンジカが最も多く、次いでイノシシが多くみられたという。また、キツネ、タヌキ、アナグマなどのほか、イヌ、ノウサギなどもみられ、キツネ、アナグマは多くの縄文遺跡ではあまり確認される動物種ではなく、本遺跡の特徴の1つといえるという。これらの動物遺体から山谷での狩猟活動も行われていたことを示している(小川 2019)。

佐々木由香らの植物遺体の分析では、食用可能な種実として、ヤマブドウとブドウ属、サクラ属サクラ節、キイチゴ属、ムクノキ、エノキ属、コウゾ属、クワ属、クリ、コナラ、コナラ属コナラ節、オニグルミ、ウルシ属ヌルデ、キハダ、カラスザンショウ、ミズキ、クマノミズキ、マタタビ属、ニワトコ、ガマズミ属、ヒエ属、ダイズ属、ササゲ属アズキ亜属、アサ、ヒョウタン仲間、エゴマ、シソ属などの種実を中心とした大型植物遺体を確認されている。ナラガシワの堅果の集積層や多数のオニグルミが検出されていることから、これらの堅果類を食料として利用していたことは間違いないだろう。このほか、香辛料としてのカラスザンショウ、薬用や灰汁ぬきに利用できるキハダ、魚毒として使用されるハクウンボク、繊維植物のカラムシやヤブマオ類といった植物の利用が、雷下遺跡の生業を支えていたと考えられるという(佐々木ほか 2019)。

## 8. まとめ

以上、雷下遺跡から出土した棒状木製品の形態や出土状況、そこに暮らした人や環境、食糧資源などについてみてきた。千葉県に限らず、縄文時代の低地遺跡の調査によって出土した木製品は多く、棒状の木製品類は多様な形態の出土例がある。雷下遺跡から出土した棒状木製品は、早期後葉の海進期の海岸に暮らした人々が使用した道具である点で非常に興味深い資料である。形態などの詳細についてはすでに記したが、この特異な形態の木製品の民俗例はあるのだろうか。

東京国立博物館に北海道アイヌが19世紀に使用していた「マレク」と呼ばれるサケ漁用の鉞が所蔵されており、数点が公開されている。写真7・8がマレクで

ある<sup>1)</sup>。7の全長は60.5cm、8は50.0cmである。この道具は柄の先端の溝に紐のついた鉄の鉤を取り付けたもので、遡上する鮭を獲るために用いられた。鉤が鮭に刺さると柄からはずれ、紐が引っ張られて鉤が回転して外れなくなるものだという。大きさでは雷下遺跡などの出土例の1m~1.7mの棒状木製品と比べれば、大きく下回る長さだが、マレクの柄の先端はやや尖り、中心から片側に寄った位置に最大径があって、持ち手の部分にかけては緩やかに細くなり、全体の形状は雷下遺跡例によく似ている。雷下遺跡の諸例には、溝や穿孔はないが、第2図の1などには中央からやや上側の部分には凹みが認められ、紐などを巻いた痕跡の可能性があり、何らかの使用痕とも考えられる。マレクのような付属品を装着した漁労具の民俗例から、雷下遺跡などの棒状木製品は単体で使用されたのではなく、他の木製部品や石器・骨角器などと組み合わせて使用した道具の可能性もある。棒状木製品の長さの違いは、使い手の体格や獲物となる魚種の違いを反映しているのかも知れない。



写真7 マレク1

写真8 マレク2

残念ながら、漁の対象となった魚類については詳細は明らかでないが、河口における漁や、丸木舟を使った沿岸での漁などに使用された漁労具の一つであったのではないかと推測される。

ハイガイの分析では周年の貝採集も行われている可能性が高いことから、この地での生活が定住的に行われていた時期もあったと考えられる。また、人骨の安定同位体分析から雷下遺跡に暮らした人々が、強く海産物に依存していたことが推定されており、浜に住んだ集団の規模は不明だが、漁村的な性格を有した村が定住的に営まれていた時期もあったことは間違いないだろう。一方、海産物資源のみでなく、出土した動物遺体などから台地での狩猟なども行われていたことや、直近の浜での貝採集にとどまらず、近隣沿岸での貝採集や丸木舟を使用した浅海域にとどまらない古東京湾での漁労活動などから、広域的な資源獲得活動が行われていたことが推測できる。

今回取り上げた棒状木製品については、類例の渉猟が十分できていないが、雷下遺跡や道免き谷津遺跡以外にも類似した木製品が埼玉県デーノタメ遺跡から出土していた(磯野ほか 2019)<sup>2)</sup>。海辺から遠く離れた遺跡からの出土例であり、そのような内陸からの出土例も漁労具の可能性を否定するものではなからう。ここでは、雷下遺跡などから出土した棒状木製品が漁労具のひとつであり、他の部品と組み合わせて使用した道具の可能性を指摘するにとどまるが、遺跡の環境なども含めた検討を進め、この木製品の用途を探っていく必要があるだろう。

本稿を草するにあたり、以下の方々にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。服部智至 井出浩正 大谷弘幸 村松裕南 田島 新

#### 註

- 1) 出典：国立文化財機構所蔵品統合検索システム(ColBase=マレクより画像掲載)
- 2) デーノタメ遺跡は、中期～後期の低地遺跡を含む集落遺跡で、「尖頭状木製品」として報告された34.4cmの破片が出土している。縄文時代中期と報告されておりクヌギ材を使用し、民俗例にみられる「粥ばし」に似た形態で神の依代として用いられた可能性があるとしている。大宮台地の北部に位置するこの遺跡の立地は、昭和40年代半ばまで「デーノタメ」と呼称される約1,000㎡の溜池が所在しており、こうした湧水による豊かな水環境を特徴とする立地であるという。このことから、内陸においても豊かな水環境を背景とした漁労が行われ、その道具の一つとして使用されていたものかもしれない。

#### 引用・参考文献

- 蜂屋孝之 2013『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書4 - 市川市道免き谷津遺跡第1地点(4) -』千葉県教育振興財団第703集
- 服部智至・太田敬宏・小川慶一郎・蜂屋孝之・今泉潔・上守秀明・橋本勝雄2017『東京外かく環状道路埋蔵文化財発掘調査報告書12 - 市川市雷下遺跡(5)・雷下(6)・松戸市上矢切南台遺跡(9) -』千葉県教育振興財団第768集
- 服部智至・蜂屋孝之・大久保奈奈・太田敬宏・小川慶一郎 2019『東京外かく環状道路埋蔵文化財調査報告書14 - 市川市雷下遺跡(1)～(4)・(7)～(10) -』千葉県教育振興財団第780集
- 下記引用は服部ほか2019に所収
- 服部智至「第3章 第2節 貝サンプルと貝類の分析」
- 服部智至「第7章 第1節 遺跡空間利用と雷下遺跡の性格」
- 蜂屋孝之「第7章 第3節 丸木舟について」
- 澤田純明・佐伯史子「付章1 自然科学分析(1) 第3節 人骨の形態人類学および古病理学的報告」
- 米田 穰「付章1 自然科学分析(1) 第5節 人骨・動物骨の安定同位体分析」
- 小川慶一郎「付章1 自然科学分析(1) 第6節 陸生哺乳類」
- 黒住耐二「付章1 自然科学分析(1) 第7節 微小貝類」
- 樋泉岳二「付章1 自然科学分析(1) 第8節 貝殻成長線分析」
- 百原 新・岩原ころこ・工藤雄一郎「付章1 自然科学分析(1) 第9節 大型植物遺体(1)」
- 佐々木由香・バンダリ スタルシャン「付章1 自然科学分析(1) 第10節 大型植物遺体(2)」
- パリノ・サーヴェイ株式会社「付章1 自然科学分析(1) 第13節 雷下遺跡の古環境」
- 能城修一・佐々木由香・小林和貴・鈴木三男「付章2 自然科学分析(1) 第11節 木製品類と自然木、編組製品の樹種」
- 能城修一・一木絵理・工藤雄一郎・佐々木由香・森 将志・小林和貴・鈴木三男・中村俊夫「付章2 自然科学分析(2) 第2節 雷下遺跡(8)出土の丸木舟および周辺堆積物の自然科学分析」
- 佐伯史子 2006「解剖学的方法による縄文人の身長推定と比下肢の検討」『日本人類学会誌』Vol.114
- 磯野治司・齋藤成元・坂田敏行 2019『デーノタメ遺跡総括報告書』北本市埋蔵文化財調査報告書第22集